

# かぐらおか

(題字は初代学長 山田守英氏)

## 第 65 号

平年2年9月14日

編集 旭川医科大学  
 厚生補導委員会  
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 歯科口腔外科 島崎 善徳)

エゾライチョウ

アレキサンドリア大図書館と	第37回地区体準硬式野球10年振り
私の小図書館……………黒島 農汎…2	2度目の優勝!!……………9
ぶらんとさいころじい……………岩渕 次郎…3	第33回東医体(夏季)総合で準優勝に輝く!!…9
旭川医科大学に入学して……………山本 健治…4	全医体の成績結果……………10
旭川医科大学に入学して……………二森亜紀子…4	課外活動短信……………10
卒業生の動向……………5	教官の異動……………10
「卒業後10年に思うこと」……………相馬 光宏…6	助教授に就任して……………吉田 逸朗…10
「卒業後10年に思うこと」……………橋本 博…7	研究室紹介……………病理学第一講座…11
第16回医大祭……………8	研究室紹介……………整形外科学講座…11
大学祭実行委員あの人この人……………8	訃報……………12
	窓 外……………石川 睦男…12



## アレキサンドリア大図書館と 私の小図書館

生理学第一講座・教授 黒島 辰 汎

世界で最初の本格的な図書館はギリシャ王朝がエジプトのアレキサンドリアにムセイオン(学士院)の付属機関として紀元前330年に開設したアレキサンドリア大図書館であり、パピルス(紙)の図書50~70万冊を擁していたと伝えられている。しかし、現在その存在は文書のなかでしか知ることができない。ここを舞台にアルキメデス、ユークリッドが活躍した。また医学者ヘロドロスは、彼は神経系を明らかにし、脳がその中枢であること、また動脈と静脈のなかを血液が流れていることを示し、血液循環の仕組みを示唆している。その他多くの優れた学者が輩出している。ユネスコとエジプト政府によって、この古代の知の殿堂をアレキサンドリアの地に再び甦らせようとする計画が今年始まった。この新アレキサンドリア大図書館の青写真はすでに出来上がり、年内に着工、1995年完成、地中海地域やアラブ世界の文献を中心に400万冊の図書を収蔵する予定で、総事業費1億6千万ドル、わが国にも応分の負担が求められるという。日本の力の見せどころであろう。

この記念すべき年に偶然の一致だが、また、さきやかなわが図書館(書庫)ができることになった。旭川に家を建ててから17年が経ち、あちこち改修の必要になったのが契機だった。物置的な本収納場所はあった。今度はスペースを倍増し、耐火構造の本格的な書庫になる。小さい頃から本が好きで、好きな本は手元に置きたいという欲求が人一倍強かったように思う。そんな気持ちはいつのまにか、将来は自分の好きな本に囲まれて過ごせるような仕事がやりたいな、というところまでエスカレートした。母が本だけは苦しい家計の中からほとんど無条件で買ってくれたことが、そんな傾向を助長したようである。今は、こと志と異なり実験屋になってしまったので、ゆっくりと本を編んで毎日を送るというわけにはいかない。ただ気持ちだけは今もその頃と変わらない。そしていつの間にか家の至る所で目立つようになった本がようやく書庫らしき場所に落ち着くことができたのは旭川医大に赴任することになり新しい家ができたからである。しかし、それから家のあちこちに行き場がなくなって、途方にくれたような本の群落が目立つようになってきた。一応妻や子供には私の所有している本はいずれも貴重なものであり、現在では入手不可能なものも沢山あると話してある。勿論事実と幾分は違っているわけだが、私に

とっていずれも、少なくともその一ページは、いや一行は何か意味を持っているのは確かだし、自分で本らしいものを書いてみて、本の一行にどれだけのエネルギーが注がれているかが分かってみると全部が掛け替えの無い大事なものに思われる。妻から今回の家の改修では私の本置場を本格的なものとしたらという提案を、そんなわけで幾分面映ゆいところもあったが飲むことにした。

私の持っている本の数を正確に数えたことはないが、ほぼ1万冊位、その内訳を一般的な分類でみれば、総記10%、自然科学35%、哲学5%、歴史5%、社会科学15%、文学20%、芸術5%、語学5%といったところだろうと思う。蔵書のベスト5は、1. *Les Oeuvres de Claude Bernard, Baillière, Paris, 1881(19 vol.)* : 現代医学の先駆者クロード・ベルナルの業績全集。

2. *Müller, J. : Handbuch der Physiologie des Menschen, J. Hölscher, Coblenz, 1834-1840(2Bde.)* : 19世紀ドイツ最大の生理学者Müller が著した19世紀最初の生理学教科書。実験的医学のバイブルとされた。

3. *И. П. Павлов Полное Собрание Сочинений, Академия Наука СССР, Москва, 1951(9 Том.)* : 消化生理学、大脳生理学の先駆者であるロシアの生理学者バヴロフの業績全集。4. *Les Chefs-D'Oeuvre du Musée de Luxembourg, Lapina, Paris, 1922* : パリのルクセンブルグ美術館(現在は閉鎖)の所蔵作品による画集。当時としては色が良くでている。わが国であり知られていない絵が納められている。クロード・ベルナルの有名な実験示説の絵を描いた画家Lhermitteの作品(「収穫の支払い」)がでている唯一の画集。

5. *Le Dix-Neuvieme Siecle, Hachette et Cie, 1901* : 19世紀のフランスの風俗、芸術、思想、科学についての総攬で、珍しい図版が沢山収められている。パスツールの国葬の情景が見られる。

願わくばアレキサンドリアの知の殿堂の再建にあやかって、わが小図書館も、これからのわが活力の源泉にならんことを!

(私の書庫のために、色々と情報をご教示いただいた図書館の渡辺公愷さん、斎藤温子さん、有難うございました。エジプトからアレキサンドリア大図書館の資料を送って下さった道新の大沼安史さん、またよろしく。)



## ぷらんと さいころじい

心理学教授 岩 渕 次 郎

私の学んだ北大の“実験心理学”講座（I・II）は、道内の基礎心理学の拠点であったが、戦後間もなくの開講以来30年にして残念ながらその名が途絶えてしまった。10数年前、それまで「哲学科」所属だった心理学と社会学が、文化人類学とともに新たに「行動科学科」を編成した際、発展的に解消されたものである。“老舗”の看板を降されて一片の感傷が過らぬでもないが、代って新設された講座は、認知情報学・数理行動学・比較行動学・社会行動学・動態社会学等々ときさすがに清新である。ともあれ、“関連諸領域の連繫（interdisciplinary research）”を通して人間行動に関する包括的理論の構築をめざす行動科学の台頭に伴い、“行動（behavior）”は今や心理学の枠を越えて益々学際的な key word となってきた。

さてその行動とは何かとなると、心理学でもこれがいま一つはっきりしない。例の Watson, J.B. が、当時の心理学界が研究の対象としていた“心・意識・心像”などを、すべて間主観性に耐え得ないものとして斥け、新たに行動を据えて「行動主義」を宣言（1912）してから80年近くにもなる。しかしこの間、行動の概念について独自の主張が数多くなされ、行動の意味は一層錯綜してきた。さまざまな定義の内容は事典に譲るが、さらに行動論的アプローチからは、工学的概念の“システム（系）”を援用して個体（やその集合体）を一つのシステムとして捉え、行動をその“システムの出力”とする見解まで寄せられている（系のアナロジーで人や動植物、社会、さらには工学機械、自然などが同じ地平に立つことになり、ここから行動科学と生物学や物理学などとの情報互換の道が開かれる）。しかし行動の概念がそこまで広がってしまうと、伝統的心理学に育った私などは、もうここら辺りで立ち停るしかない。

ところで心理学は、いうまでもなく生活体（有機体）の行動に関する科学であるが、ここでの対象は専ら人と動物であり、植物は除外するのが通例である。恐らくこれは、科学的認識というよりもわれわれの“常識的”判断（または直観）に基づくものと思われる。例えば、彼ら（？）には心や意識がない、高次の神経機構を欠く、（従って彼らには行動がない）、仮りに行動を認めたとしても動物のそれとは余りにも異質であり、その研究は人間行動の理解に資するところがない等々である。

しかし彼らの生きる姿は、（manifestation はともかく）有機体としての本質的な特性でとくに動物と大きく隔たるとは思われない。彼らは、形態学的には多細胞から成る各種（呼吸・感覚・運動・栄養・生殖など）の仕組み（器官）を具え、機能的には個体保存・代謝・成長・環境に対する調節と適応を果たしている。この姿のな

かに、“内外の刺激に対する反応の総体”という、まさに生活体の行動の原点を想起するのは、あながち“非常識”ではあるまい。確かに、彼らの行動の顕われ方（刺激に対する反応の時間的継起や可視性など）は動物と著るしく異なるし、行動解発の“から操り”（知覚・反応に関わる情報の伝達機構など）も違う（というよりも判っていない）が、しかしそれらのことは、植物の行動研究自体の意義や価値を些かも損うものではなからう。

尤も、これまでに植物心理や植物行動についての研究が全く無かった訳ではない。門外漢の私には及ばぬところだが、文献の上ではカタバミやマリーゴールドに対する日周期性の条件づけの試み（Psychology of plants., Farr, 1922）が最初の科学的研究らしい。研究の古典としては、植物の反応とウェーバーの法則との関連についての研究（Plant behavior., Fuller, 1934）も挙げられよう。従来植物行動の研究で好んで取りあげられてきたのは、刺激に対する反応速度の比較的早いオジギソウやハエトリグサである。その機構について、古くには動物の反射弓と類似のものが想定されたり（Molisch, 1929）、最近では植物ホルモンの放散（ホルモン説）が有力なほか、新たに神経仮説も検討されている。この仮説についての Scott（1962）の説明によれば、淡水産藻類のシャジクモ（algae Chara）の特大細胞を刺激した際の電気化学的变化は、動物（ヤリイカの巨大軸索）の刺激に対する反応の統御過程と本質的に類似しているという。勿論両者には異なる点もある（形質膜の脱分極に当って、イカでは Na イオンが、シャジクモでは Ca イオンが内部へ流入する、反応速度は植物ではるかに遅い）が、過程の本質や活動電位の様相からは、そこに何らかの神経機構の存在の余地があると言われる。

現在植物心理学の研究者がどのくらい活躍しているのか知る術もない。彼らの研究が人間行動の解明に果して貢献するものか見当もつかない。しかし、いま心理学を含めた行動科学が、近接領域との協働を一層深めようとしつつあるなかで、植物についての先きの常識は、もうそろそろ見直されても良からう。“常識”はつねに“良識”とは限らない。むしろ常識を越えたところこそ新しい飛躍も期待されようというものだ。

この夏、新聞にシメジ業者が“音楽栽培”で大きな成果を上げているとの記事があった。話しは面白いが、この種の話題には時に擬い物が紛れ込んで、真摯な研究者の業績にまで疑惑をもたらすことがある。いつか何処かの雑誌に「植物に対する音（楽）刺激の影響に関する研究」が掲載され、学界に波紋を投じることを期待したい。

## 旭川医科大学に入学して

第1学年 山本 健治

故郷、鹿児島より遠く離れたこの地旭川にやって来て、既に4ヶ月がたちました。今この数ヶ月をふり返ってみて、感じるままの事を書いてみようと思います。

まず、まっ先に思うのは、「初心を忘れない」という事がいかに大切であり大変なことであることかという事です。講義を例にとってみても、はじめはどの講義も少しも聞きもらすまいと、耳をすましペンを走らせていました。ところが大学生活に慣れるにつれて、どの講義は重要でどの講義はそうでないと自ら受講を望んだはずのそれらを、打算的な目で見えるようになり、さらにひどいことには、「一般教養なんて医学部にはいらないよ」などと自らの怠惰の言い訳までするようになりました。誠に恥しい限りです。心底では分かっているのです。一般教養のない専門馬鹿になってはいけません。そして教養自体に限らず、その継続的かつ自主的に学ぶ姿勢を身につけることが専門過程でも大いに大切になってくると。けれども、まだまだ未熟な私は、実際には易きに流れて楽なことばかりをやってきたような気がします。そして、自分の至らなさをつくづく感じるこのくり返しがこの数ヶ月の一つの側面であったように思えます。

何か真面目ぶったことを書いているようですが、正直なところでは、低学年のうちには大学の勉強はそこそこ

にして、サークル活動やアルバイト、あるいは大学外の様々な活動などを通して、可能な限り様々な局面を体験したいとも思うのです。そのことによって様々な人と出会い、そして様々な人の気持ちを、特に自分と相反する価値感をもつ人々の気持ちを理解できるようになればよいと思います。けれども、実際今の自分ではそのような利点を得るよりも、前述のように易きに流されてしまう気がします。

それならば、どうすればいいのか？。自問自答してみると、やはり何をするにしても“ある一本の大きな柱”を自分の心にもっている必要があるのではないのでしょうか。そしてその柱とは、私であれば言うまでもなく、「自分は将来医師になるということであり、そのために何をすべきか」ということだと思います。そしてその柱をもち続けるためにも、まさに「初心を忘れない」ということなのでしょう。

偉そうな事を、長々と書きましたが、これから先も、私自身、何度弱音を吐き、逃げ道を探し、言い訳を言うか分かりません。しかし、そんな時こそ「あの時は、あんな事言ってたのに、駄目な奴だ」と自戒する時の格好の材料にこの文章はなってくれると思います。

これからの6年間が(ひょっとしたらそれ以上かもしれないが)自分の満足ゆくものであるように(テスト等の資料のお世話にはなるだろうけど)頑張っけてゆきたい、そして皆と仲良くしてゆきたいと思っています。

## 旭川医科大学に入学して

第1学年 二森亜紀子

「長い冬」の入試も終わり、新しい生活への期待を胸に抱いて旭川に来てから、早くも半年近くが経ちます。旭川での初めての一人暮らし、初めて出会う友人、初めて学ぶ大学の授業……と、短期間のうちにも新しい体験に驚いたことや、改めて感じたことがたくさんありました。その中でも当然といえば当然のことですが、一人暮らしの難しさには驚きました。以前は一人暮らしというと、何か憧れのようなものがあつたのですが、実際にやってみると、自分の甘さばかりが目につき、全てが全て楽しいことばかりではないということがよくわかりました。誰にも何も言われない生活は楽といえば楽かもしれませんが、裏を返せばきちんとした自己管理が要求される厳しい生活だと言えるでしょう。そしてまた、一人暮らしに欠かせないものと言えば、何といっても友人との強いつながりだと思ふます。家族と生活している時にはどうという事ではなくても、不慣れなこともあって、最近体調を崩した時にも大変心細い思いをしたのですが、その時に友人が調子を気づかって電話をくれた時にはとても安心したものです。入学早々に先生方からも友人を作りなさいとよく言われましたが、大学を中心とした限られた世界で生活していくためには、友人の力が絶大だ

ということを身をもって感じた訳です。これから徐々に勉強を進めていく上でも、求める姿勢で臨まなければ得ることが少ない、と言われる大学の勉強では、一人で悶々と悩んでいるだけではなく、できるだけたくさんの人と共に考え、悩み、話し合っていくことも大切なのではないかと思います。その点、100人という人数は小人数ではありますが、全国各地のいろいろな土地から集まって来た個性豊かな同級生は、みな同じく「医学を学ぶ」という共通の目的を持って旭川に集まっているのですから、友人との強いつながりから得るものは、何物にもかえ難いものがあるはずですよ。

また、大学で初めて出会った“新たな恐怖”というものもあります。次から次へとやってくるテストももちろんですが、自分の努力いかんによっては次の学年に上がれない、ということや、同学年に2年を越えて在学することはできない、等の厳しい進級条件です。これは今まで平穏な毎日を温室で育ててきた私には一見とてもシビアな事に思えてしまふますが、求める勉強をする大学においては当然のことと言えるのでしょうか。とにかく、いい加減な気持ちは大学においては全く通用しないということをつくづく感じさせられます。今後の6年間にはおそらく山も谷もあるでしょうが、自分で精一杯の努力をして、一度だけの大学生活を悔いなく、楽しく過ごしていきたいと思っています。

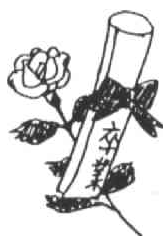


## 卒業生の動向

去る3月23日(金)に本学を卒業した122名の勤務(連絡)先は次のとおりです。

また、4月に行われた第84回医師国家試験には本学卒業生132名が受験し、115名(平成2年度卒業生111名)が合格しました。

(学生課)



# 「卒業後10年に思うこと」



第二期生 相馬 光宏

(遠軽厚生病院)

旭川医大を2期生として卒業後、早10年が過ぎた。10年間の思い出など思いつくことを書いてみたい。

## ◎卒業後1、2年目

医師国家試験に無事合格、並木正義教授率第三内科に入局させていただいた。医局と附属病院7階東病棟での生活だったが、仕事が遅かったせいか(それとも準夜の看護婦さんのお弁当が楽しみだったのか)なぜか夜遅くまで病棟に残っていた記憶がある。看護婦さんも同世代が多く(道看1、2期生など)、結婚した同僚も数名いる。医局対抗野球での優勝など楽しい思い出も多い。

## ◎卒業後3、4年目

大学院後半の2年間、第一解剖学教室小野一幸教授のもとで学位論文作成の御指導をいただいた。それまでの生活とうってかわり、出勤が8:30、お茶は10:00と15:00、お昼は12:00、19:00に帰宅というとても規則正しい生活であった。実験計画の立て方、動物の購入から飼育、文献の整理、固定、包埋、超薄切、染色、電子顕微鏡の操作、撮影、現像、焼きつけ、さらには論文の書き方へと、手取り足取りお教えいただき、無事大学院を卒業することができた。(小野先生、教室の皆様、お世話になりました!)世界では新しい研究の成果が刻一刻と発表されており、その最先端の情報を整理しそこに集中して努力すれば、自分達にも何か新しい実験結果を得る可能性があることを知り、うれしかった。

## ◎卒業後5、6年目

再び第三内科医局と病棟の生活にもどったが、6年目の12月末から翌3月にかけて、開院したばかりの釧路市医師会病院に勤務した。卒業以来初めての第一線病院であり、釧路の夜の救急を一手にひきうける夜間外来は、とても疲れたが大変勉強になった。

## ◎卒業後7～10年目

市立旭川病院第13詰所にて、武田章三先生の御指導のもと、数多くの消化器疾患の症例を経験させていただいた。珍しい症例も数多くあり、症例発表、論文投稿など臨床研究に関しても充実した日々を送ることができた。病理の神田先生は常日頃「剖検の取れない医者には、いてもらわなくてよい(家族の方々に剖検を承諾していただけるよう一生懸命診療せよとの意味)」と言い、夜中にもすぐにかけて来て下さるので、病院の剖検率は非常に高かった。特に黄疸で発症した悪性リンパ腫症例、

特殊な組織型の肺癌症例などにおいては、剖検の重要性を実感することができた。

## ◎現在

平成2年春、ここ遠軽厚生病院へ内科主任医長として着任した。診療以外にも、平成4年の病院新築へ向けてのプラン作成、入院カルテの整備、院内感染対策など、今まで全く無頓着でいられた事柄について頭を悩ませなければならないこともあるが、なんとか頑張っている。

## ◎今後

(1)この10年の間に旭川医大の各医局もスタッフが増え、徐々にその勢力範囲を広げつつある。中でも遠軽厚生病院は内科、小児科、産婦人科、整形外科、泌尿器科、眼科と、外科以外の固定医をすべて旭川医大出身医師の評判は、まじめで仕事熱心と良いものが多いと聞く。この評判を損ねぬよう今後とも努力したいものと考えている。

(2)今年の東医体において旭川医大バレー部がひさびさの優勝を勝ち得たと聞いた。(おめでとう!)僕たちが旭川医大に入学しバレー部を作ったころには、先輩もなく、ただ楽しくバレーをやりたい者同士が集まり頑張った結果が幸運にも東医体2連覇に結びついた。現在のバレー部員にしてもその一人一人の努力の結果がこの優勝なのだろう。しかしその心のどこかに「先輩にもできたんだから自分たちにもだってできるかもしれない。だから初めからあきらめずに目標は高く設定して頑張ってみよう!」こんな勇気をほんの一瞬でも与えることができれば、それが伝統のもつ力なのかもしれない。今後とも旭川医大の伝統を作るためにも、一人一人が各自与えられたそれぞれの持ち場で頑張っていきたい。





## 「卒業後10年に思うこと」

第二期生 橋 本 博

(泌尿器科 講師)

卒業から10年が過ぎ、もうお世辞にも青年とは言われず、体型も含めていわゆる中年の仲間入りをしてしまいました。この年月の間には、自分の職業を選択し、家庭を持ち、もうすっかり人生のルールに乗った感があります。いまさら別のルールに乗り換えるのも、いかにも大変そうだし、ここまで来たらもう「この道一筋」と言うお誉めの言葉を戴くように頑張るしか手はないようです。

学生時代は、可もなく不可もなく過ごし（優と良ばかりであったと言う意味ではもちろんありません。念のため）、その後大学院に進ませてもらいました。この大学院入学当時は、漠然と癌の勉強をしたいと言う気持ちでおりましたが、幸いなことに米国留学から帰って来たばかりの坂下茂夫先生の指導を受けることが出来ました。坂下先生は、ラミニンと言う基底膜特異蛋白を初めて分離精製した人で、その抗原と抗血清を持って帰国されておりました。私もそれを利用した仕事をさせていただき、何とか4年間で大学院を修了することが出来ました。

泌尿器科の教室で仕事が出来たため、大学院の最後の1年間くらいは実験と、そのまとめに集中することになりましたが、それまでは臨床の勉強も並行させる形をとらせてもらいました。同期が4人居たため、点滴や腰椎麻酔の腕を競いあったり、総回診の前日には夜遅くまで病棟で、半分おしゃべり、半分仕事と言うような感じで過ごすなど、今思えばあまり大きな責任もなく、自由で実に楽しかった時期であったと思います。このような時期に先輩、同僚との出会いを大切に、自分の方向を探っていくことが非常に重要なことであると感じます。

大学院を修了した後の1年間、深川市立病院に勤務致しました。それまで先輩の庇護のもとに仕事をしていて、いざ一人で勤務してみると、何とも言えない自由さと、同時に、自分がいかに何も出来ないかを痛感しました。また、他科の医師や看護スタッフとの協調の大切さがよくわかり、短期間でしたが、非常に貴重な1年間であったと思います。

その後大学院に戻り、あっという間に5年が過ぎました。この5年間は、泌尿器科臨床医としてのトレーニングと、諸先輩の指導で折角スタートさせることが出来た癌の臨床、基礎研究を何とか発展させて行くこと、の2点について考え続けて来たつもりですが、最近「少年老い易

く、学成り難し」と言う言葉の重みをひしひしと感じています。自分が怠け者であることはよくわかっているつもりなので、いつも意識的に、やや無理とも思える計画を立て、自分を追い込むようにして仕事をして来ましたが、学会発表の日が近づいたりすると、本当に無理な計画であったことに気付くわけです。こうして、胃の痛むような経験を何度かする内に、自分の能力に次第に疑問が生じ、自己嫌悪に陥ることがしばしばです。しかし幸か不幸か、楽天的で忘却が得意な性格のため、何とか大学生活を送ることが出来ています。

卒後10年と言う時期は1つの曲がり角と思われ、同期の中でも、最近、関連病院に固定したり、開業したり、また、役所勤めや会社勤めに「デューダ」したりと、かなり方向が分かれて来ているようです。同期会でも、自分の研究について熱っぽく語る人が居る一方で、「いったいつまで大学に居るんだよ。」と言う人も居て、年を追う毎に価値観は多様化して行くようです。いずれの考えが正しいかは別として、とりえず自己の価値観なり夢を信じて行くしかないだろうと思っています。幸い、今の私は、臨床も基礎的研究もある程度自由に計画し、実行出来る立場にありますので、状況が許せば、今暫く勉強させてもらおうかと思っています。

今回この原稿を依頼された際、「何か後輩を力付けるような文章にして下さい。」とのことでしたが、全くかけ離れたものになってしまったようで心配です。ただ、確固たる指針など元よりないわけで、自分の道は自分で探すしかなく、自分の夢や価値観を信じて努力を続けることが大切である、としか言いようがないように思います。その際、ある程度は楽天的に、そして時には忘却も必要であると言うことを付け加えておきたいと思います。



# 第16回医大祭

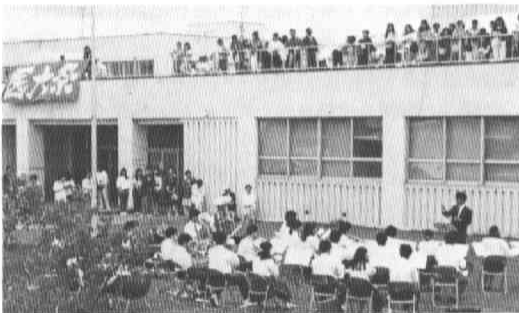


スポーツ大会

準備の出遅れとスタッフ難で開催が危ぶまれた第16回医大祭も、少数精鋭の実行委員の頑張りで6月14日(木)~17日(日)までの4日間の全日程が開催された。

今年で16回目を迎えた医大祭は、14・15日のスポーツ大会、16・17日の一般公開と開催され、特に一般公開の講演会は市民の関心も高く、多数の参加を得て好評の中終了した。

(学生課)



グリーンコンサート



医療講演会

## 大学祭実行委員 あの人 この人

—医大祭を終えて—

例年このスペースは実行委員長の独壇場ですが、今年は実行委員長が2回目ですので、この場で実行委員各自の『大学祭への思い』を紹介したいと思います。

○大学祭実行委員会・委員長 5年 平澤克己

私は何の因果か2年連続で大学祭実行委員長という大役をやらしていただきました。別の言い方をすれば、私は1/490000という狭き門をかいくぐって、2年連続実行委員長をやったこととなります。これはおそらく本学始めて以来の快挙であり、将来も2度とないであろうと思っています。私は自慢話をしているわけではありません。学祭が好きで、学生生活の何分の1かをそれに費した人もいるということを感じて下さい。

○大学祭実行委員会・副委員長 5年 福島憲治

ヘルパー主任の岡村くん、物品移動をてつだってくれた森・西修・片山・岩森・管・花田各くん、さし入れをしてくださった田伏・田中くん・須貝さん、当日てつだってくださったその他様々なたくさんの方々、本当にありがとうございました。みなさん、学祭とはこういった人たちによって成り立っているのです。

○大学祭実行委員会・総務局長 5年 山上英樹

私が実行委員会に参加し始めて3度目の、そして私の携わる最後であろう大学祭を遂に終える。思えば、どう考えても祭好きといえない私が、よくこれだけ続けてきたと、今さらながら不思議である。一方、今年に至っての実行委員会の規模縮小を残念に感じる。はたからみて確かに雑用の少ない活動であるが、自らの手で物事を作り上げる楽しさに少しでも接してみてもらいたいと思う。来年、開拓者となる新たな人員が集い、自分達の大学祭を楽しんでくれることを期待して止まない。

○大学祭実行委員会・事務局長 5年 原英彦

我々5年生は医大祭に全力投球できる事実上の最高学年である訳だが、その医大祭も無事終了した。ところで医大祭が存続の危機にさらされているという事実を学生の何人が認知しているのだろうか。来年度の実行委員数は果たして何人になるのか。例えば、おろしハンバーグの上に味噌をかけて食べた美味しかった様に、4月になって実行委員をやってみたら楽しかったということもあるだろう。諸君、食わず嫌いはやめて医大祭を動かしてみよう！来年度も医大祭の灯が点りますように！！

最後に、第16回医大祭に御協力してくださった方々に御礼を申し上げるとともに、その成功を祝い万歳三唱で締めくくりたいと思います。

「バンザイ！バンザイ！バンザイ！！」



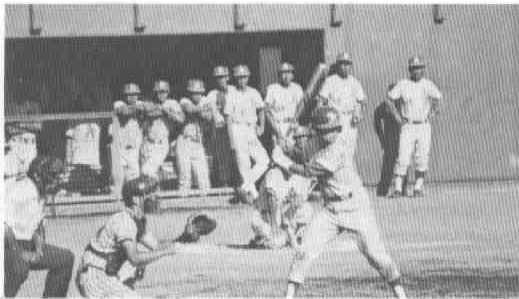
## 第37回地区体 準硬式野球 10年振り2度目の優勝!!

第37回北海道地区大学体育大会は、小樽商科大学が当番校となり43大学48単位が参加し、7月13日(金)～15日(日)の3日間、開催された。

本学からは男子9種目、女子5種目に参加し、準硬式野球が10年振り2度目の優勝、卓球女子3位、弓道女子3位と健闘し善戦をくりひろげた。

参加種目の成績は次のとおり。

(学生課)



種目	順位	優勝	準優勝	3位	旭医大
陸上競技	男	北海学園	学院大	専修短大	9位
	女	道女短	旭教大	学院大	9位
準硬式野球		旭医大	駒沢教養	北大函教大	優勝
軟式庭球	男	学院大	北大	酪農学園 小樽商大	1回戦
	女	道女短	帯畜大	北大道都短大	2回戦
バスケットボール	男	北海学園	学院大	札教大 小樽商大	2回戦
	女	釧教大	函教大	旭教大 静修短大	3回戦
バレーボール	男	札教大	北大	北星学園 旭教大	決勝トーナメント2回戦
サッカー		北大	専修短大	学院大 帯畜大	2回戦
卓球	男	北海学園	旭川大	道工大 岩手大	ベスト8
	女	道女短	樽商大	旭医大 岩手大	3位
剣道	男	道東海旭	学園北見	室工大 釧教大	予選リーグ
弓道	男	室工大	北星学園	学院大	ベルト8
	女	樽商大	静修短大	旭医大	3位
総合	男	北海学園	樽商大	学院大	8位
	女	道女短	旭教大	静修短大	6位

## 第33回 東医体 (夏季) 総合で準優勝に輝く!!

第33回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)は、札幌医科大学の主管で7月22日(日)～8月6日(月)まで、35校が参加し、札幌市内を中心に各競技が行われた。

本学からは男女併せて23種目に参加、準硬式野球が地区体に続き東医体でも優勝、男子バレーボール、女子バスケットボールも優勝し、それぞれ全医体に駒を進めた。また陸上競技が準優勝、卓球女子が3位、軟式庭球女子が4位、男子が7位、硬式庭球男子、弓道が5位と入賞を果し総合で準優勝に輝いた。

参加種目の成績は次のとおり。

(学生課)

種目	順位	優勝	準優勝	3位	旭医大
陸上競技	男	東北	旭医	福島	準優勝
	女	新潟	東女	独協	
準硬式野球		旭医	北大	自治	優勝
硬式庭球	男	筑波	千葉	弘前 前医	5位
	女	信州 群馬		弘前	
軟式庭球	男	千葉	北大	群馬	7位
	女	北大	昭和	弘前	4位
卓球	男	新潟	東北	昭和	
	女	東女	群馬	旭医	3位
バレーボール	男	旭医	筑波	山梨	優勝
	女	東女	筑波	東海	
バドミントン	男	順天	新潟	自慈 治恵	
	女	山梨	東大	東横 女浜	
サッカー		慈恵	弘前	新潟	
バスケットボール	男	東医	筑波	自治	
	女	旭医	東女	信州	優勝
柔道		東北	自治	秋田 田医	
剣道		自治	独協	弘前 前医	
弓道		慶応	信州	新潟	5位
空手道		独協	日大	昭和	
水泳	男	東北	新潟	筑波	
	女	山形	弘前	東女	
ゴルフ	男	北大	聖マ	慶応	
総合		新潟	旭医	筑波	準優勝



### 【個人】

陸上 男子	400M	2位	加藤弘明 (4年)
	800M	1位	浅野克則 (5年)
	400Mハードル	1位	加藤弘明 (5年)
	走高跳	1位	城田 誠 (1年)
	やり投	1位	三浦 亮 (6年)
	円盤投	3位	三浦 亮 (6年)
	4×400Mリレー	1位	(浅野・小林・穴倉・加藤)——大会新
弓道	女子最高学年賞		豊田千富 (6年)
	女子新人賞		黒島研美 (2年)
	敢闘賞		柳川伸幸 (5年)
水泳	個人メドレー	3位	由良智春 (1年)
	50M平泳	3位	神藤巳佳 (2年)

## 全医体の成績結果

- 女子バスケ 準優勝 2回戦 秋田大学医学部 45:31  
 ットボール 準決勝 鳥取大学医学部 60:42  
 決勝 東京女子医科大学 49:50  
 (8月11~13日 岡山総合文化体育館)
- 準硬式野球 3位 1回戦 滋賀医科大学 3:2  
 2回戦 金沢大学医学部 1:4  
 (8月13・14日、滋賀県守山市民球場)
- 男子バレーボール 1回戦 岡山大学医学部 1:2  
 (8月9日、石川県金沢市民体育館)

### 課外活動短信

ハンドボール同好会

旭川ハンドボール市民体育大会 2位  
 (5月27日、旭川市総合体育館常盤分館)

## 教官の異動

### ○昇任

吉田 逸朗 2.4.1 細菌学講座 助教授  
 八幡 剛浩 2.4.1 生理学第一講座 講師  
 奥野 晃正 2.8.1 小児科学講座 教授

### ○併任

牧野 勲 2.8.1 保健管理センター所長

### ○任期満了

並木 正義 2.7.31 保健管理センター所長  
 (庶務課)

## 助教授に就任して

### マーカス研究室

細菌学講座 吉田 逸朗

フィリップ・マーカス教授は、古くからのインターフェロン研究者であり、インターフェロンシステム—即ち、生体におけるインターフェロンの誘発・産生・作用発現という全体像を視野に置いて、先駆的研究を進めて来た人である。マーカス先生自身の方法論的制約—即ち、今や古典的実験法になりつつある培養細胞レベルでの実験に主力を注ぐという制約—はあったが、その眼は常に、生体分子の挙動を追って来た。現在、分子・遺伝子レベルで詳細に解析されているインターフェロンの抗ウイルス作用発現のメカニズムの大部分は、マーカス先生の提唱した基本路線の延長線上にある。縁あって、このマーカス研究室で、昭和62年から昨年までインターフェロン誘発に関する研究に従事する事が出来た。マーカス研究室はさほど大世帯ではなく、私が研究室に参加した最初の頃はマーカス先生が直接実験の手ほどきをして下さった。その頃のある日曜日、マーカス先生と私の2人だけで、ウイルスのブランク測定の実験を行なった。2人別々の実験台を使い、お互いに死角の位置で、シャーレに培養した細胞にウイルスを接種していた所、急にクシャミがしたくなった。急いで顔を横に向けて「ハクション」と一発。とたんに「イツロー (私の事)、細胞に飛沫がかかる。クシャミをしてはいかん!」とマーカス先生の叱声。「いや、あの、顔は横に向けて…」というのは英語でどうやって言うのかなと思いつつ「イエッサー。」ややしばらくの静寂の後、今度はマーカス先生が「ブワクション。」私が「オ・オー」と擲擲すると、「いや、いいのだ。私はちゃんと横を向いてした。ワハハ」この実験には後日譚がある。通常、ブランク測定は、細胞にウイルスを接種した後、寒天を含む培地を流し込んで固まらせ、その後、私が日本で教わった方法では、シャーレの蓋を下にして培養する。寒天から出る凝固水がブランクを乱すのを防ぐ為である。ところが、翌日、「イツロー、シャーレは蓋を上にして置くものだ。君のは逆だ。」とマーカス先生。「しかし、凝固水が…」と言いかけると、「私の方法が正しい。これはブランク測定法を開発したダルベッコ博士の直伝だ。判ったかね。」「イエッサー。」私は今だにどちらが良いのか結論を得ていない。いづれにせよ、気さくでなおかつ頑固なマーカス先生であり、多くの事を教えられた。

「イツロー、日本からの手紙で、私の知人のT博士が準教授になったと書いてある。」「いや、日本には助教授という職はありますが、準教授という職はない筈ですが…」という会話を、今改めて思い出す。帰国後、私が助教授になった事はまだマーカス先生に報告していない。手紙に何と書こうか—アソシエイトかアシスタントか……。

## 研究室紹介

### ■ 病理学第一講座 ■

西川 祐 司

昭和63年4月、小川勝洋教授のもとで新しい病理学第一講座が発足してから2年余りが経過した。その間、P2レベル実験室の完成、各種実験機器の導入などによる研究環境の整備が着実に進み、従来の形態学的研究に加え、分子生物学的手法を応用した研究が可能になった。

教室の研究テーマは、主として実験肝癌をモデルとした発癌過程の解析である。現在行なっている研究は大きく3つに分けることができる。(1)正常動物と遺伝異常動物を組み合わせた肝前癌細胞の肝内移植モデルを用いた肝発癌過程の経時的追跡。(2)癌遺伝子および癌抑制遺伝子の解析による発癌メカニズムの解明。(3)電気穿孔法やレトロウイルスベクターを用いた肝細胞への外来遺伝子導入実験。いずれもこの1、2年の間に手探りで開始した新しい研究であるが、国内外の学会で注目を集めており、すでに2編の論文として発表している。最近、肝発癌におけるp53遺伝子(癌抑制遺伝子)の突然変異の関与について特に興味を持ち、研究を進めている。

実験研究、教育の他に、病理学教室としての業務、すなわち剖検および院外受託材料の病理組織検査もわれわれの重要な任務である。貴重例の症例報告や剖検例の臨床・病理カンファレンスを積極的に行なっている。また、外科病理学を学ぶ上で、本学附属病院病理部および旭川赤十字病院病理部は絶好の研修場所になっている。これから、実験で培った技術を人体例に応用し、分子病理学的な研究も行なっていきたいと考えている。

現在、教室を構成しているメンバーは、小川勝洋(教授)、西川祐司(助手)、酒井博司(1内)、稲垣光裕(2外)、福田郁江(小児)、徳差良彦(1病)、今井政人(2外)、斎藤義徳(3内)、太田知明(3内)の9名である。教室固有のスタッフはまだ少ないが、若くて優秀な大学院生・研究生が数多く在籍しており大きな力になっている。山上祐子事務官、小谷佳子実験助手も大きな存在である。学部学生もよく出入りし、彼等をまじえた分子生物学関連の読書会や人体病理学関連の抄読会などを定期的に行なっている。

時に研究を忘れ、全員で飲みでかける。とある焼きとり屋に始まる宴会はわれわれの大切な行事でもある。また、第一病棟の野球チーム、黒と黄の派手なユニフォームのマクロスは昨年初勝利をあげ、勝つ味をようやくおぼえたところである。第二病棟との定期戦(下田杯)と医局対抗野球に照準を合わせ練習を重ねている。

1枚の組織切片の特定の部位から病理形態のみならず蛋白質、核酸などに関する詳細な情報を引き出せるようになった現在、われわれは疾患の本質に可能な限り近づこうと日夜努力している。

(病理学第一講座助手)

## 研究室紹介

### ■ 整形外科科学講座 ■

後 藤 英 司

整形外科教室は旭川医大の開学より2年後、1975年の4月に九大より竹光義治を迎え開設されました。医局員も現在60名を越え、うち30名が道北地域の教育関連病院で指導医、研修医として勤務しておりますが、まだまだ整形外科医の要望は高い様です。現在、附属病院に於ける外来診療は従来通りですが、増加する患者数に対応できないため、新患予約制をとっており皆さんに御不便をおかけしております。また、入院希望者に対しベッドや看護婦さんの不足のため入院がなかなかできません。現在外来での入院待が3ヶ月以上にもなり、患者さんに御迷惑をおかけしております。今後解決したいと思っております。研究面では、当教室の主要研究である脊椎グループが竹光教授、原田助教授を中心に脊椎疾患の病態解明、疫学、治療を行っております。特に、近年脊椎疾患の診断、治療に必須といわれる脊髄モニタリングに関して熱田助手、今井技官を中心に独創的な仕事が多岐にわたって行なわれ、学会賞が与えられました。

この他、安藤講師を中心とする股関節グループ、平山講師を中心とする上肢グループ、宮津助手を中心とする下肢グループと疾患により専門化されております。更に、これらと密接に関連しているのが渡壁助手、今井技官のバイオエンジニアリング部門であります。昔の整形外科医のイメージは元気だけ良くて荒っぽさというものでしたが、実際には顕微鏡を使って繊細な神経や血管を縫合したり、コンピューターを使ってじっくり解析したりで少し様変わりした様です。

スポーツも盛んですが一時の野球熱も選手の高齢化と新しいヒーローが出現しないせいか下火になってきており、最近はおっぱらゴルフが盛んな様です。当教室も15年経過し、現在、新しい展開の時期を迎えております。しかし、教室創設当初からのPTの先生や看護婦さんをはじめ関連他職種の方々と連帯を重視し、地域に根ざした仕事を、しかも国際的なレベルを目指せというモットーは変わらず、これからもやって行きたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

(整形外科 助手)





## 訃報

本学名誉教授 石井兼央氏  
(67才)には、6月11日(月)  
午後3時30分脳出血のため急  
逝されました。

ここに謹んで哀悼の意を表  
します。

同氏は開学直後の昭和49年4月1日に本学の内科学

第2講座教授として就任され、昭和63年3月31日停年  
により退官されるまで永年にわたって、医学の研究と  
学生の教育・指導にあたられ、本学の医学・医療の発  
展・進歩に多大な貢献をなされました。

また学術研究面では、膵臓癌・慢性膵炎の病態及び  
診断に関する研究を行い、独創的な研究業績を挙げ、  
国際的にも高く評価されていました。

そのほか、附属図書館長・副学長として本学運営の  
枢機に参画され、本学の発展に管理・運営面からも寄  
与されました。  
(庶務課)



## 窓外

石川 睦男

### 2つの不妊学会

昨年の秋はたて続けに国内外の2つの学会に参加し、  
改めて日本と外国とのギャップを実感する機会となった。  
9月2、3日は清水哲也教授を会長に私達の教室が中心  
となり、第34回日本不妊学会が旭川で開催された。一般  
的に日本での学会は、時間厳守の統制のとれた学会運営  
が目標とされている。1年も前から会場の確保、特別講  
演やシンポジストのarrangement はもとより、旅行社の  
手配、懇親会の準備に医局の諸氏は夏休み返上での大奮  
闘であった。学会の中心となる演題は、一般講演、ポス  
ター合計で300題を越え、その内容は最近の生殖医学の進  
歩を示す体外受精・胚移植、配偶子操作などを頂点に様  
々な不妊治療に関するものが多く、避妊、母子保健など  
については皆無に近い状況であった。又、学会運営は整  
然と行われ、懇親会も大盛況のうちに終えたことは言う  
までもない。

この後私は、教室の3人の同僚と10月1日からの第13  
回世界不妊学会に参加する為、モロッコの古都マラケ  
シュへ飛んだ。貧乏旅行の為、検討の末、アエロプロート  
でモスクワ、マルタ経由でカサブランカを目指した。モス  
クワのtransit hotelのaccomodationの悪さに悩まされ、  
漸くマラケシュに到着。空港では素晴らしい香りの(しか  
し恐ろしく甘い)ミントティのサービスで出迎えられた。  
夜10時頃、バスでホテルへ向う途中、美しい星空の下、  
不思議な、かつ懐かしい香りに気付いた。しかしその正体  
は不明であった。翌朝その芳香の正体が判明。それは市

中の主な交通手段である馬車に使用する馬の落し物であ  
ったのだ。懐しい訳である。さてこの学会はアフリカで  
初の国際医学会ということで、モロッコ王国の大変な肝  
入であり、そのためにホテルが建設されるという程のも  
のであった。ところがまず学会登録をしようとしたが、遅  
々として進まない。他の参加者に聞くと、その日は2日  
目なのでまだ良い方で、1日目はコンピューターの故障  
で、朝から並んでもその日のうちに登録できず、諦め  
て戻る人が大半で、ほとんどの人は開会式には参加でき  
なかったという。さて教室からの2題の発表の時はスラ  
イドの受付の場所が分からず、止むを得ず持参するが、  
今度は予定していた座長が居ない。会場に居る1人がそ  
の代行をするという様なハプニングの連続であった。幸  
い、教室のN嬢、K君の発表は内容が新しい為質問も多  
く好評のうちに終了した。しかし全体の学会運営は時間  
のズレ等は序の口でスライドの流れが悪くクレームが続  
出。フランス語圏の為、英語はあまり役に立たず増々混  
乱するなど大変であった。演題で目につくのは、体外受  
精などもあったが、ピルやIUDなど避妊に関するものが  
多かったことである。WHO主催のシンポジウムでは、開  
発途上国の母子保健対策、特に母体死亡率、周産期死亡  
率減少対策が注目を集めていた。

この様に同じ不妊学会でも日本と世界では、扱うテー  
マも、運営方法も全く異なっている。我国では最近出生  
率の低下が問題となっているが、世界規模でみると、人  
口爆発の問題が最大の課題であることが分かる。マラケ  
シュの旧市街メジナに一步足を踏み入れると、ロバと人  
間しか通れない狭い迷路に人々が群がり、首をたたく落  
された羊や、手工業による織物の店が並び、モロッコ人  
の原点を観る思いであった。さらに夜に観た官能的なバ  
リーダンスの踊り子のベルベル人女性の美しさに圧倒さ  
れ、メジナの人口の多さが納得され、再度、避妊の重要  
性を痛感したのであった。

(産婦人科学講座 助教授)